

「インフルエンザ パンデミック」 新型ウイルスの謎に迫る

河岡 義裕, 堀本 研子 著

BLUE BACKS版, 18cm, 238頁, 定価本体880円
(講談社2009年9月発行)

インフルエンザウイルス関係の本の紹介というと今更と思われる方も多いと思うが、インフルエンザウイルス流行の問題点を明確に理解するために本書を紹介したい。本書はインフルエンザウイルス研究の第一人者といえる東京大学医科学研究所河岡義裕教授と堀本研子氏の共著である。

教授の紹介をしたい。専門外の方は河岡教授をご存じではない方もおられると思うが、河岡教授は、リバーシ・ジェネティクス法を用いてスペイン風邪ウイルスやエボラウイルスの人工合成を行ないウイルス感染症の分野で先進的な業績を挙げられている現在最もホットな科学者の一人である。2002年野口英世記念医学会賞、2006年ロベルト・コッホ賞、2007年武田医学賞を受賞され、さらに本年、「インフルエンザウイルスの人工合成法を用いた基礎ならびに応用研究」で第47回読売農学賞を受賞された。インフルエンザウイルスの専門家として数々の国際学術雑誌の編集委員をつとめる世界的にも著名な方である。

私は、教授がウイスコンシン大学教授を経て1999年に医科学研究所の教授になられた際、リバーシ・ジェネティクス法によるインフルエンザウイルス人工合成の研究の講演を拝聴して以来、度々教授の研究室のホームページを拝見している。

さて本書であるが、著者は冒頭に「本書の目的は新型インフルエンザをめぐる様々なニュースを興味本位に紹介し、危機感を煽り立てることではない。むしろ狙いとすところは情勢や時代が変わっても価値を失うことのないウイルス学の基本的知識や考え方を一般の方々に知ってもらうことにある」と述べられている。まさにその目的を達成している本といえよう。何のためにこれほど危機感を煽るのかと思う本や報道もある中で、教授の科学者として社会にいかに関与するかという思いが伝わってくる本である。本書ではインフルエンザの抱える問題点を明確にするために模式図や電子顕微鏡写真を用いてインフルエンザウイルスの細胞への感染様式、増殖、ウイルスの変異についても詳細に説明を行なっている。そのため聞きなれない専門用語もあり、消化不良をおこす方もあると思うが、その先にある興味あふれる内容を知るために我慢して是非読んで戴きたい。一般の方は勿論、ウイルス学を専門とする研究者にとっても十分に読み応えがある内容である。

ウイルスの本というと、堅苦しい内容ばかりと思われがちであるが、それ以上に伝わってくるのは、教授の研究に対する熱意である。さらに共同研究のデータの紹介から、教授の研究仲間を大切にする姿勢を感じるのは私だけであろうか。教授のインフルエンザウイルス研究の足跡を知るには、併せてインフルエンザ危機(集英社新書、2005年)も読まれることをお勧めしたい。研究者としての教授の素顔が伺える本である。



(財団法人予防環境協会 室内空間研究所所長 鈴木 博)